【カテゴリーⅠ】

日本建築学会計画系論文集 第87巻 第795号, 842-853, 2022年5月
J. Archit. Plann., AIJ, Vol. 87, No. 795, 842-853, May, 2022
DOI https://doi.org/10.3130/aija.87.842

1990年以降の東京における神社をめぐる都市開発とその経緯

- 東京都区部の神社の空間分析および開発経緯のオーラルヒストリーから -

URBAN REDEVELOPMENT OF SHRINES IN TOKYO AFTER 1990

-A Spatial Analysis of Shrines in Tokyo and an Oral History of the Development Process-

泉川　時[*1], 後藤春彦[*2], 吉江　俊[*3], 森田椋也[*4]

Toki IZUMIKAWA, Haruhiko GOTO, Shun YOSHIE and Ryoya MORITA

The purpose of this project is to examine the transformation of shrines that have progressed with re-urbanization and to discuss the issues of shrines at the turning point by clarifying the spatial change and development process through a survey of shrines that have been developed under the initiative of the private sector in Tokyo ward area. Through the research, it was clarified that the shrines have progressed due to the unique development, changes in visitors' behavior, and the creation of new value. On the contrary, the relationship between the various powers surrounding the shrine was found to be unbalanced.

Keywords: *Shrine, Re-urbanization, Tokyo ward, Authenticity, Structure of Development*

神社，再都市化，東京都区部，オーセンティシティ，開発圧力

1章 緒言

1-1 背景

東京は、神社や寺院のような聖なる空間と生活の場とが密接に結びつき、渾然一体として都市を築き上げてきた[注1)]。こうした聖なる空間の多くは、高度経済成長期においても開発を免れてきた[注2)]。しかし、1990年以来の人口の都心回帰とともに進行する再都市化[注3)]の圧力下においては、遂に神社も周辺地域との一体的な開発に晒されることとなった。

近代社会の中で、前近代から継承されてきたものがいかにして共存できるかは、都市計画において度々注目されてきたテーマである。中心市街地の都市再開発をめぐるジェイン・ジェイコブズとロバート・モーゼスの論争[注4)]や、トップダウンの都市開発と草の根のまちづくりの対抗運動にみられるように、開発に対して風土的なもの・歴史的なものを守る動きは度々起こっている。他方、後期近代を見据える社会理論においては、もはや前近代的なものは観光対象として近代社会の論理にとり入るかたちでしか生き残り得ないという議論も生じており[注5)]、両者は引き裂かれた関係にある。

いま、日本の大都市で開発に晒されている神社では、まさに都市計画が長らく取り組んできた古いものと新しいものとの闘争が行われている。しかし、都市計画の研究領域においてはこれらの実態への関心は低調であり、実際にのちにみるように、各々の将来像は開発圧力に晒された個別の判断に委ねられている。歴史的な転換点にある都市に立地する神社に対してどのような諸力がはたらき、いかなる経緯によって開発が進められたのかを俯瞰的に把握し、その課題を明らかにする必要がある。

1-2 研究の目的と方法

以上の背景に対して本稿では、東京都区部（以下単に「都区部」とも示す）の神社795社[4)]を対象とした悉皆調査とケーススタディによって、神社をめぐる都市開発の経緯とその空間変容を明らかにすることを目的とする。

研究の概要をFig.1に示す。2章では都区部の神社を悉皆調査し、

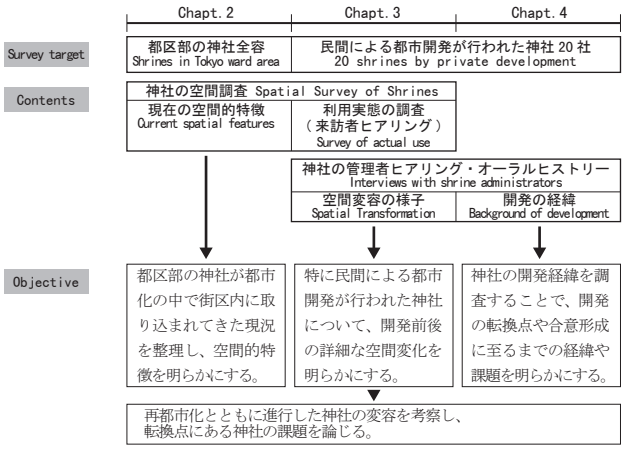


Fig.1 Outline of research

*1 早稲田大学大学院創造理工学研究科　修士課程（建築学専攻）　Graduate Student, Graduate School of Creative Sci. & Eng., Waseda Univ.
*2 早稲田大学理工学術院　教授・工博　Prof., Faculty of Creative Sci. & Eng., Waseda Univ., Dr.Eng.
*3 早稲田大学創造理工学部建築学科　講師・博士（工学）　Assistant Prof., Dept. of Architecture, Waseda Univ., Dr.Eng.
*4 徳島大学人と地域共創センター　講師・博士（工学）　Assoc. Prof., Ctr. for Comm. Engagement and Lifelong Learning, Tokushima Univ., Ph.D.

神社の配置、境外参道(定義は後述)などの周辺環境による類型化を行い、開発に晒された神社がどのような位置にあるか把握する。そのなかで特に民間企業による開発の影響下にある神社を対象に、3,4章では管理者と来訪者のヒアリング調査を行う。3章では開発前後の神社の空間変容とその利用実態を把握する。4章では開発経緯に着目し、管理者のオーラルヒストリー[注6]から、その合意形成に至るまでの過程と課題を整理する。これにより、再都市化過程における神社の空間変容とそれを取り巻く主体の関係性を論じる。

1-3 本研究の位置づけ

本研究は、⑴神社の形態に関する研究と⑵再開発における既存建築物のマネジメントに関する研究の2領域にまたがるものである。

1)神社の形態に関する研究

神社と周辺環境との関係性に着目した研究では、堀口ら[5]の盛り場に注目した研究があり、盛り場が佐賀・松原神社を核として形成され、神社との空間構造の共通性をもつことが論じられている。一方、神社の参道に着目した研究として、岡村ら[6]は東京都心部の灯篭や鳥居などの起点モニュメントのある境外参道の全数調査によって、来訪者の誘引効果を促す神社空間の特性を明らかにした。

他方で、神社を含む都市空間の形態学的研究として、藤村ら[7]は小規模の建築物で囲まれ、内部にオープンスペースをもつ街区の構成とその形成過程を明らかにし、分析の過程で寺社の参道を主とした動線の意義を示唆している。

2)再開発における既存建築物のマネジメントに関する研究

再開発における既存建築物のマネジメントに関する研究は多数あり、慎ら[8]の駅前再開発の商店街に着目し、関連主体の連携関係を類型化した研究や、雨宮ら[9]の都心開発事業における都心型エリアマネジメントの実現の連続性を明らかにした研究などが挙げられる。

都市化の進む現代における神社の役割変化の研究として、石井[10]は1984年にビル化した銀座の朝日稲荷神社を調査し、神社にとって都市化の影響が他宗教の受けるそれより重大な課題であることを示唆した。雨宮ら[11]は日本橋の福徳神社を事例に、都市開発における歴史的文脈の保全・再生の合意形成の取り組みを明らかにした。

3)本研究の位置付け

以上のような研究が報告されているなかで、1)神社の形態に関する研究においては、開発による都市部の神社の変容を捉える研究は少なく、本稿は萌芽段階にある本領域の全体像を網羅的に明らかにする取り組みである。加えて本研究では、2)再開発における既存建築物のマネジメントに関する研究の観点から、ヒアリング調査によって神社の開発をめぐる各主体の関係性を明らかにする点に独自性を有する。

2章 東京都区部における神社の形態の類型

本章では、東京都区部の神社の悉皆調査によって神社周辺の空間形態の類型化を行う。開発に晒される神社を扱うにあたり、まず都区部の神社の現況を整理し、空間的特徴をみたうえで開発された神社がどのような位置にあるかを把握するものである[注7]。

2-1 分類の方法

1) 市街地の空間形態に留意した分類

都市の神社を分類するにあたり以下のことに留意した。まず、佐藤滋は、これまでの陣内秀信や西村幸夫らの建築・都市の歴史に

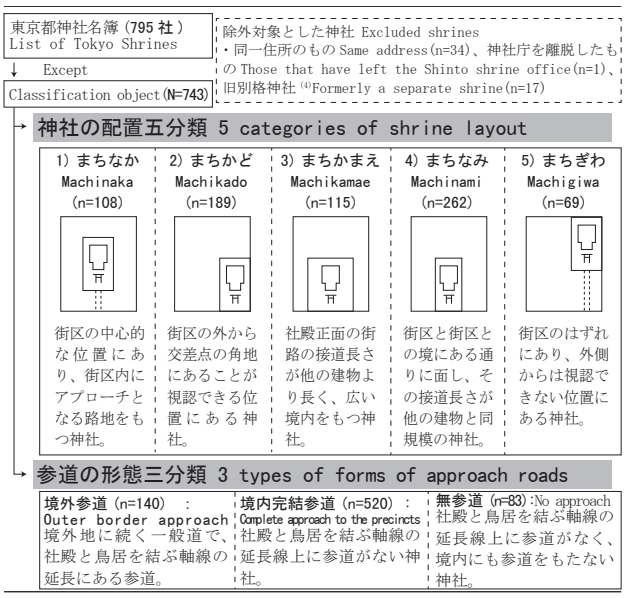


Fig.2 Method to classify shrines

着目した都市類型の研究に対し、安定した建築類型をもたない乱雑な市街地形態を対象とした一連の研究を行っている。その延長として、関・佐藤[12]の研究では低層建築から高層建築までを10の類型で表し、その複合としての街区の建築更新や接道状況によって街区計画論をまとめている。また藤原ら[13]の不忍通りを対象とした研究では、近世までの集落において地形に密接に関わる地物として神社や街道を挙げ、近代以降の道路整備による歴史的変容をまとめている。このように都市開発の多い市街地では、一つの建築物ではなく、街区や道路に着目した形態分析によって、その歴史的変容をまとめることが有効だと考えられる。そこで本稿では、神社を街区の配置と参道の形態に着目して市街地に立地する神社の空間形態の類型化を行うこととする。

2) 分類の方法

神社の分類方法をFig.2に示す。都区部の神社795社（東京都神社庁発行の名簿記載）を分類するにあたり、まず名簿が発行された平成25年以降に神社庁を離脱した神社と、名簿に同一住所が記載された神社の、計35社を除いた。また、現代においても社会や周辺環境の変化によらず、その空間形態を維持してきたといえる旧社格の高い神社[注8]17社は別分類とした。次に、残りの743社の周辺環境との関係性に着目し、航空写真、ゼンリン住宅地図、現地調査とGoogleストリートビューを参照し、神社の街区内での配置と参道の形状によって分類する。これらの分類方法とその特徴については次節以降に詳述するが、その際に境内地[注9]の推定を以下のように行った。

まず、所在地においてその神社を構成すると思われる社殿、社務所、鳥居、その他神楽殿などの建物の位置を把握した。そして、その街区内の公園や隣接する建物が明らかに神社と所有・維持管理の関係にないと思われるものを除いた領域を境内地とした。道路については地図や現地にて神社の私道である旨などの記載があるか確認し、境内地に含むか判断した。上記の判断基準において、隣接する建物が明らかに神社と所有・維持管理の関係にないと判断がつかないもののうち、現地調査から神社の建物とオープンスペースやアプローチを共有している集合住宅や商業施設が24件抽出された。これらの詳細な分析については次章以降で扱う。

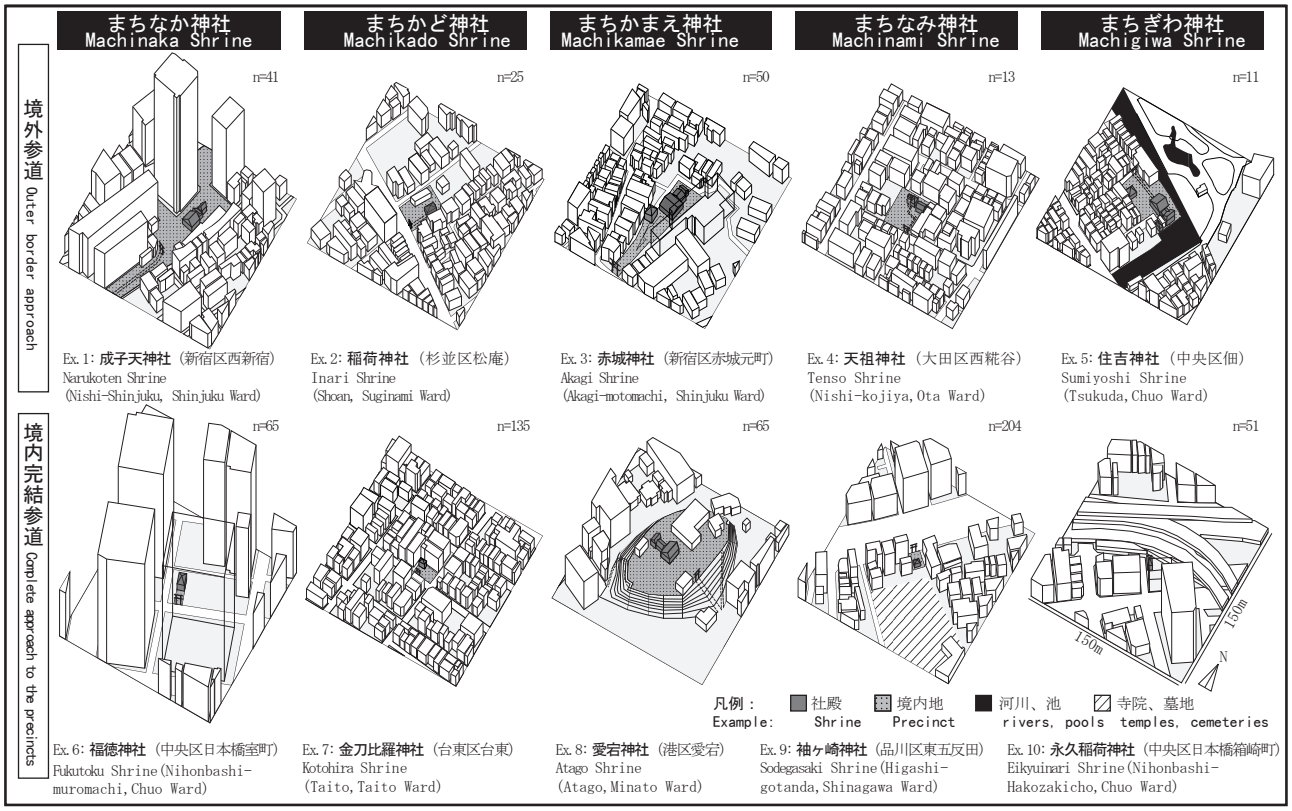


Fig.3 Spatial types of shrines in Tokyo ward area

2-2 神社の街区内での配置

まず、神社の街区内での配置を分類し、これらを「まちなか神社」、「まちかど神社」、「まちかまえ神社」、「まちなみ神社」、「まちぎわ神社」と命名した。以下、これらの分類について詳述する(Fig.3)。

1) まちなか神社(n=108)

街区の中心的な位置にあり、街区内にアプローチをもつ神社を「まちなか神社」と命名した。街区の中心がオープンスペースとなっているものを先述の藤村ら[7]は中空街区と呼称し、40年以上それを維持している街区の中空部は7割以上寺社であることを明らかにしている。まちなか神社はこれに該当し、比較的長く維持されてきた履歴と、街区内のアクセスの良さなどの立地特性をもつことがわかる。

2) まちかど神社(n=189)

交差点の角地にあり、街区の外から直接アクセスできる神社を「まちかど神社」と命名した。人通りが多く、まちの目印となりやすい環境にある。他方で澤田ら[14]の研究によれば、古くからの街並みが残る地区での角地の建物用途の9割以上が住居・事務所・商業系であることがわかっている。まちかど神社は、交差点にあるため視認性が高いが、伝統的な街並みでは数が少ないことがわかる。

3) まちかまえ神社(n=115)

広い境内をもち正面が街路に接している神社を「まちかまえ神社」と命名した。例えば赤城神社（Fig.3 Ex.3）は、長い正面の参道から始まり、奥へと広がりを見せることで、神社の荘厳さを演出している。このようにまちかまえ神社は、周囲の喧騒から距離を置くように、境内の環境を整えるための広さが確保されている。

4) まちなみ神社(n=262)

周辺の建物や敷地と同様のスケールの境内をもち、通りに面する神社を「まちなみ神社」と命名した。例えば袖ヶ崎神社（Fig.3 Ex.9）は、大通りに面して他の建物と横並びになり、外から気がつきにくい配置となっている。このようにまちなみ神社は、従来の「町の外縁」にあったような神社ではなく[注10]、周囲に溶け込むようになっている。

5) まちぎわ神社(n=69)

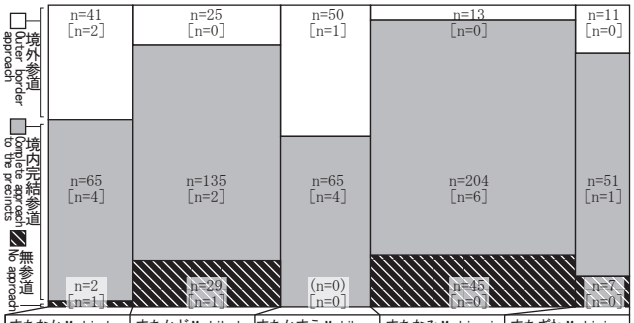
交差点の角地にあり、街区の中に入り口をもつ神社を「まちぎわ神社」と命名した。例えば永久稲荷神社（Fig.3 Ex.10）は、首都高速道路と区営住宅沿いの街区の脇にあり、人目につきにくい場に立地する。このようにまちぎわ神社は、交差点に対して背を向けているため外側から視認しにくい立地であることがわかる。

2-3 参道の形態

神社の参道に着目すると、社殿と鳥居を結ぶ軸線上に伸びる境外参道のある「境外参道保有神社」は140社あった。境外参道がなく境内で参道が完結している「境内完結神社」は520社が該当し、参道を境内にもたない「無参道神社」は83社あった。境外参道は、神社に奥行きをもたせ聖性を演出する、一般的な形態である[注11]。しかし都区部の神社では都市開発などにより境外参道をもたず、境内にオープンスペースをもたない神社も多くあることがわかった。

2-4 小結　都区部の神社の全体構成(次頁Fig.4)

本章では都区部の神社を街区内の配置と都市と接続する参道の形態によって類型化した。各類型の神社の比率を面積として表した図がFig.4である。この図からまちかど、まちなみ神社が都区部に多く立地し、境外参道保有神社は全体の2割に満たないことがわかる。特に、境外参道保有神社はまちなか、まちかまえ神社、無参道神社はまちかど、まちなみ、まちぎわ神社に顕著にみられる。神社の形



まちなか Machinaka	まちかど Machikado	まちかまえ Machikamae	まちなみ Machinami	まちぎわ Machigiwa
まちなか神社は、境外参道が多く、他の街区に接しない位置にあるため路地につながる参道が多く、街区のなかでも求心性をもつ。	まちかど神社の境外参道は、神社に合わせた交差点の配置を求めるため、成立が難しい。また、その構成はまちなみ神社と類似している。	境内の広いまちかまえ神社は、無参道の神社がなく境外参道が多い。神社のもつ奥性が強調されやすい空間形態を現在まで維持している。	水平方向に建物が並ぶまちなみ神社は、境外参道の割合が最も少なく、無参道神社が多いため、奥行きを感じさせにくい配置になっている。	まちぎわ神社は、街区の正面からから切り離された配置にある。そのため視認性が低く、全体の中でも該当する神社が最も少ない。

n：該当数 Applicable number　[n]：民間主導の都市開発が行われている神社数（計24社） Number of shrines where private-sector-led urban development is taking place

Fig.4 Composition of shrines in Tokyo ward area

態が比較的維持されているまちなか神社、広い境内をもつまちかまえ神社が少なく、その他の神社では境内地の十分な確保さえできていない無参道神社が多く存在する実態がわかった。このような境外参道をもたない神社や街区の角地に立地する神社が多い傾向は、都市化のなかで神社が街区内に取りこまれてきた結果であると考えられる。さらに神社の空間形態に着目すると、集合住宅や商業施設のオープンスペースと境内地を共有している神社が24社あることがわかった。以降の章では、これらのケーススタディにより、神社の変容を詳細に追っていく。

3章 民間開発による神社の空間変容とその利用実態

前章では都区部の神社を対象として、神社の形態の全体像を捉えた。そこでは、集合住宅や商業施設とオープンスペースを共有する神社24社が発見されたが、これらの公式サイト、電話による確認を行った結果、全て民間企業による境内地を含む都市開発が行われていた。本章以降では、この民間による都市開発が行われている神社のうち、取材許可の得られた20社を対象とする(Table1)[注12)]。

本章では、開発前後の神社の空間変容を把握したうえで、その利用実態に着目し、開発がもたらした神社の役割の変化を明らかにする。まずゼンリン住宅地図により、対象神社の建物竣工年を起点としてその5年前の地図と2019年現在の地図を用意し、社殿とその周辺の建物をプロットする。そして普段の利用実態を明らかにするため、それらの地図を提示しながら管理者にヒアリング調査を行った(Table2)。その情報を基に神社の空間変容をFig.5にまとめた（次頁）。

3-1 敷地内の建物と神社の配置

Table1に各神社の境内とそれぞれの隣接する建物の形態をまとめた。社殿と建物の関係では、多くが社殿とその他の建物が別棟になっている分離型であるが、そのうち雉子神社のみ、建物に囲まれた地上階の吹き抜けに社殿が建っている。建物と一体になっているものは、社殿の位置する階によって、屋上型と地上階型に分けられた。また、建物の業務形態は、まちなか神社・まちかまえ神社にマンションが多く(n=4/5)、まちかど神社・まちなみ神社にオフィスが多い(n=5/8)ことがわかった。

3-2 神社の配置計画

神社の配置計画に関する語りから、「社殿の設計」、「境内建物の計画」、「その他の空間変容」についてまとめる。

1）社殿の設計

①方位

社殿の方位は、一般に太陽の昇る東向きや南向きが良いとされて

Table2 Interview in Chapt.3

調査対象 Subject	対象神社の神職・事務員	Managers of target shrines
調査期間 Period	2019/9/25ー2019/10/21	
調査方法 Survey method	該当神社のうち取材許可の得られた神職や実態を知る事務員 (N=20) の 1ー2 時間程度の対面式ヒアリング調査。	Two-hour face-to-face interviews with the administrators(N=20) of the shrines with permission to be interviewed.
調査項目 Survey Items	(1)基本情報 (2)神社の空間形態の変化 (3)祭祀の実態	(1)Basic Information (2)Changes in the spatial form of shrines (3)The reality of rituals
調査対象 Subject	ゼンリン住宅地図	Zenrin Housing Map
調査方法 Survey method	該当神社の建物竣工年を起点とした、その4、5年前と現在の地図の比較調査。	A comparative survey of maps from 4 or 5 years ago to the present, starting from the year when the building of the relevant shrine was completed.
調査項目 Survey Items	該当神社周辺の 150m 四方の範囲における街区と建物の様子	Street area and buildings in a 150cm square area around the shrine

Table1 List of shrines and interviewees(Chapt.3 and 4)

基本情報 Basic information						管理者ヒアリング概要 Manager		来訪者ヒアリング人数	敷地内の建物と神社との関係 Relationship between buildings on the site and the shrine			祭祀の特徴[注2] Features		
No.	神社名 Name	神社の配置 layout	参道の形態 Approach	竣工年[注1] Completed	鎮座地 Location	対象者 Subject	奉職年数 Years of service	Number of Subject Visitors	社殿 Shaden	社務所 Shrine office	業務形態 Type of business	神職 Priests	神輿 Mikoshi	露店 Stalls
1	ToyoiwaInari Shrine	Machinaka	None	1995	Ginza, Chuo	Clerk	2	3	Ground Type	Integrated type	Commercial facilities	Not in	×	
2	Narukoten Shrine	Machinaka	Outer	2014	Nishi-Shinjuku, Shinjuku	Guji（宮司）	30	8	Separate type	Separate type	Condominiums	Permanent		
3	Suga Shrine	Machinaka	Outer	2014	Sugamachi, Shinjuku	Gonnegi（権禰宜）	19	5	Separate type	Separate type	Housing complex	Permanent		○
4	Fukutoku Shrine	Machinaka	Complete	2014	Nihonbashi-Muromachi, Chuo	Guji（宮司）	14	5	Separate type	Integrated type	Complexes	Permanent		
5	Tenso Shrine	Machinaka	Complete	2016	Roppongi, Minato	Guji（宮司）	14	4	Separate type	Separate type	Condominiums, Complexes	Permanent		○
6	Hamacho Shrine	Machikado	None	2005	Nihonbashi-Hamacho, Chuo	Guji（宮司）	50	4	Separate type	Integrated type	Condominiums, Complexes	Not in	×	
7	Hibiya Shrine	Machikado	Complete	2009	Higashi-Shinbashi, Minato	Guji（宮司）	35	4	Rooftop type	Integrated type	Offices	Permanent		
8	Suitengu Shrine	Machikado	Complete	2016	Nihonbashi-Kakigaracho, Chuo	Guji（宮司）	23	3	Rooftop type	Integrated type	Stores	Permanent	×	
9	Kiji Shrine	Machikamae	Complete	1994	Higashi-Gotanda, Shinagawa	Guji（宮司）	10	4	Separate type	Integrated type	Offices	Permanent		○
10	Hikawa Shrine	Machikamae	Complete	2002	Sengoku, Bunkyo	Guji's wife	21	1	Separate type	Separate type	Housing complex	Permanent		○
11	Inari Shrine	Machikamae	Complete	2005	Ikejiri, Setagaya	Guji（宮司）	21	3	Separate type	Separate type	Condominiums	Permanent		○
12	Akagi Shrine	Machikamae	Outer	2010	Akagi-Motomachi, Shinjuku	Guji（宮司）	50	3	Separate type	Integrated type	Condominiums, Cafes	Permanent		○
13	Kotohiragu Shrine	Machikamae	Complete	2004	Toranomon, Minato	Negi（禰宜）	31	4	Separate type	Integrated type	Offices	Permanent	×	○
14	Koishikawadaijingu	Machinami	Complete	1966	Koishikawa, Bunkyo	Gonnegi（権禰宜）	1	-	Separate type	Integrated type	Kindergarten	Permanent		
15	Mitake Shrine	Machinami	Complete	1980	Shibuya, Shibuya	Clerk	1	-	Rooftop type	Integrated type	Commercial facilities	Not in		
16	Asahiinari Shrine	Machinami	None	1984	Ginza, Chuo	Clerk	27	3	Rooftop type	Integrated type	Offices	Not in	×	
17	Asahi Shrine	Machinami	Complete	1993	Roppongi, Minato	Negi（禰宜）	15	3	Separate type	Integrated type	Offices	Permanent		
18	Matsushima Shrine	Machinami	None	1994	Nihonbashi-Ningyocho, Chuo	Guji（宮司）	13	3	Ground Type	Integrated type	Offices	Permanent		
19	Tsukudo Shrine	Machinami	Complete	1994	Kudan-kita, Chiyoda	Guji（宮司）	37	5	Separate type	Integrated type	Offices	Permanent		
20	Kitayainari Shrine	Machigiwa	Complete	1997	Jinnan, Shibuya	Guji（宮司）	32	4	Rooftop type	Integrated type	Offices	Permanent		

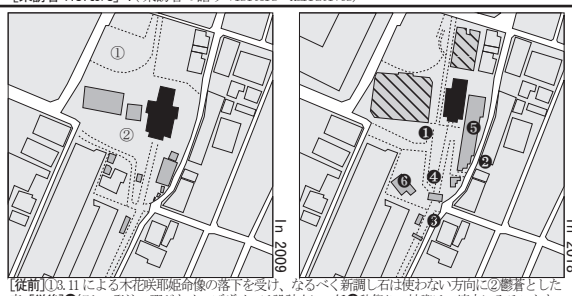
図注1　竣工年とは、対象神社が関与する建物を建てた年を示す。このような建物が複数回建設されたものは最新の建物が竣工された年を示す。
注2　神職が常駐している神社を「常駐」、普段は不在の神社を「不在」と表す。お祭りのとき、御神輿が出ないものを ×、露店が出るものを○で示す。

各類型の代表例 Typical examples

［従前の様子 Conventional］，［従後の様子 Subsequent］：（管理者の語り Manager's Narrative）
［来訪者 Visitors］：（来訪者の語り Visitors' narratives）

Machinaka Shrine まちなか神社（n=5）

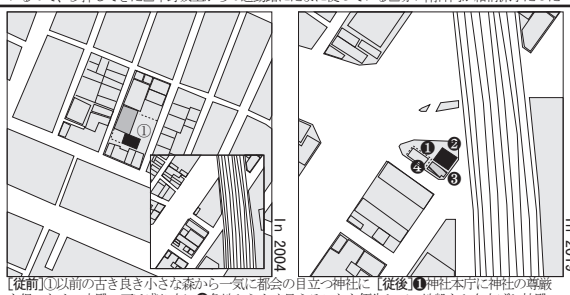
例）No.2 Narukoten Shrine（Nishi-shinjuku, Shinjuku Ward）成子天神社（新宿区西新宿）



［従前］13.11による木花咲耶姫命像の落下を受け、なるべく新調し石は使わない方向に②鬱蒼とした森［従後］❶細かい発注の暇がなく、デザインは設計士に一任❷秋祭りの神輿は、境内に入ることなく宮出し・宮入を行う❸神酒所や盆踊りのスペースにならぬよう植栽を配置❹鳥居は前より明るい色に❺授与所の拡大❻能舞台をイメージした神楽殿［来訪者］□Pokémon GO でここがスポットになっているので、参拝してきた□中野坂上からの通勤路にたまに使っている□赤い狛神門が結構派手だった

Machikado Shrine まちかど神社（n=3）

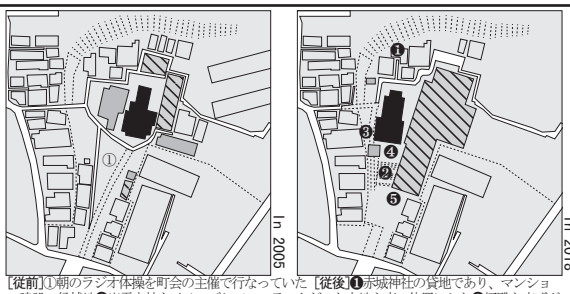
例）No.7 Hibiya Shrine（Higashishinbashi, Minato Ward）日比谷神社（港区東新橋）



［従前］①以前の古き良き小さな森から一気に都会の目立つ神社に［従後］❶神社本庁に神社の尊厳を保つため、本殿の下は盛り土に❷角地からよく見えることを優先して、地盤をかさ上げし社殿の方位は西向きに❸騒音に配慮して二重サッシにしたが、意味がなかった❹内装や化粧は経費節減のため実現できないものも多かった［来訪者］□偶然通りかかり参拝□会社が近いため参拝□近代的なビルがあっても昔ながらの神社だと感じた

Machikamae Shrine まちかまえ神社（n=5）

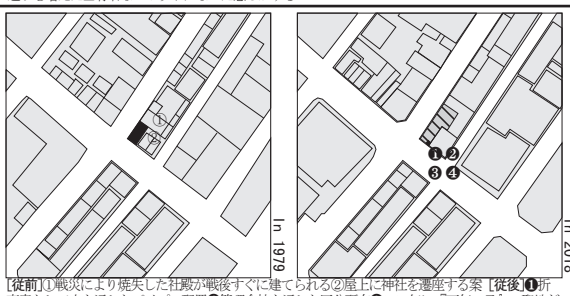
例）No.12 Akagi Shrine（Akagimotomachi, Shinjuku Ward）赤城神社（新宿区赤城元町）



［従前］①朝のラジオ体操を町会の主催で行なっていた［従後］❶赤城神社の貸地であり、マンション建設の候補地❷出雲大社をイメージして、フラットだった大地を高い位置にした❸拝殿を広げガラス張りに❹社殿は様式に囚われない隈研吾の意向❺戦前あった茶屋をイメージしたあかぎカフェ［来訪者］□以前は平地だったのに階段になり鳥居から神社が見えなくなり嫌に□新しくなって人の通りも増えた□有名なスポットになった感じがする

Machinami Shrine まちなみ神社（n=6）

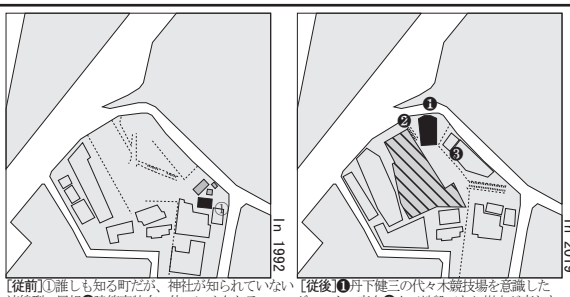
例）No.16 Asahiinari Shrine（Ginza, Chuo Ward）朝日稲荷神社（中央区銀座）



［従前］①戦災により焼失した社殿が戦後すぐに建てられる②屋上に神社を遷座する案［従後］❶折衷案として土を通したパイプの配置❷管理会社を通した区分所有❸2019年に『天気の子』の聖地だと話題に❹youtube などでの撮影に使われるように［来訪者］□youtube で聖地として紹介されており参拝□『天気の子』の聖地だと聞き参拝□閑静な感じがして小さくても神様がいる感じがする

Machigiwa Shrine まちぎわ神社（n=1）

例）No.20 Kitayainari Shrine（Jinnan, Shibuya Ward）北谷稲荷神社（渋谷区神南）



［従前］①誰しも知る町だが、神社が知られていない［従後］❶丹下健三の代々木競技場を意識した流線型の屋根❷建築家特有の使いにくさとランニングコストの高さ❸人工地盤であり樹木が育たない［来訪者］□境内が神社らしくない□街並みにあっているし文化の一つだと思う□氏子がそうせざるを得なかったのだと思った

その他の神社 Other shrines

No.1 豊岩稲荷神社 Toyoiwainari Shrine

［従前］○昔はバラック街や原っぱが広がっていた［従後］●参道部分は所有していないため、地権者との兼ね合いで意匠を考えている●社殿の地下階にある町会の倉庫を2年前から社務所として開設［来訪者］□パワースポットだとネットで調べてきた□見つけにくいが土地柄しょうがない□まちと一体化している

No.3 須賀神社 Suga Shrine

［従前］○木が生い茂り境内が暗かった［従後］●2016年『君の名は。』のロケ地●地元の老人会による月2回の清掃ボランティア●ベンチ・砂利道の整備●境内地の縮小に伴う、祭りに出る露店の数が減少●樹木の伐採による採光の確保［来訪者］□『君の名は。』の聖地として3回訪れた□近所で保育園の迎えから帰る時に遊ばせながら参拝する□都会のなかでも木々に囲まれていて良い

No.4 福徳神社 Fukutoku Shrine

［従前］○日本橋魚市場の築地移転に伴い氏子のいなくなった小さなビル屋上にある神社［従後］●どの程度の動員数かわからなかったため、小さめの神札所や社殿となった●斜めに安置された鳥居などの配置計画なども神社が提案することはなかった［来訪者］□買い物の途中、鳥居が見えたので参拝した□仕事で来て参拝した□都会とは思えず安らぐ

No.5 天祖神社 Tenso Shrine

［従前］○元は踊り場で駐車場運営を行なっていたため、社殿の見通しが良くなかった［従後］●境内の見た目の印象が明るくなり、石段からの見通しが良くなった●公開空地であるため、催し物などにも都の許可が必要になった●最初からビル内神社は検討外であった●住宅棟との通り抜けゲートは開門時間を管理［来訪者］□近所の氏神であるため、参拝した□近くで勤めているため参拝した□土がなくなったが地面に埋め込まれたライトで参拝しやすくなり、これはこれで良いと思った□ビル群のなか唯一残った場所という感じがした

No.6 浜町神社 Hamacho Shrine

［従前］○小さな工場などのある商店街のならびにあった［従後］●社務所は境内から離れ、トルナーレのオフィス棟の一部を間借りすることに●社殿は1人が入れるサイズから4,5人入れる程度の広さに拡張●社殿は建替え、少し北へ遷座［来訪者］□トルナーレに住んでいてピーコックに寄る道すがら参拝した□たまたま散歩で通りかかったため□古くからある感じはしなかった

No.8 水天宮 Suitengu Shrine

［従前］○以前は参拝者が多いと道路に並び迷惑をかけていた○正面に入口がなかった［従後］●境内で完結するように設計●待合室は妊婦が多いため、ベッドにもなるベンチを100席完備●東京マラソンのコースとなる新大橋通り側に植栽●参拝者の一方通行の動線と神職の動線を別に作る●女性の使いやすい高さに設計した机●狩衣が映えるように拝殿の欄間にスポットライトの設置・本殿は伝統建築にし、サブの祭礼殿は八重雲や宇宙を想起させる自由なデザインに［来訪者］□ペットの七五三で参拝□安産の神様だと聞いて参拝□都会の神社だなと感じた

No.9 雉子神社 Kiji Shrine

［従前］○道路のところまで境内であった○裏のお寺との間に枯山水があった［従後］●社殿に音や風が通るようにしたい●設計者は室町時代の古社の写真を参考に設計［来訪者］□住んでから6年毎日氏子なので参拝している□氏子ではないが近所なのでよく参拝する□雨の日でも参拝でき、風通しと日の当たりが良い

No.10 簸川神社 Hikawa Shrine

［従前］○鳥居に前に放置自転車がよく置かれていた○自治体に危険だと指摘された急な斜面［従後］●参道に傾斜をかけスロープに●神楽殿と参集殿の整備●参集殿の庭に福島復興祈念の桜を植樹［来訪者］□信仰していないが、近所なので参拝している□集合住宅の存在感は気づかない程度であった

No.11 稲荷神社 Inari Shrine

［従前］○1998年に積雪の重みによって拝・幣殿が損壊○町会の神輿庫や社務所の雨漏りが深刻化［従後］●参集殿で文京区のさくらまつりにお茶会を開催●反対者の方の意見を取り入れ、一戸減らした●神楽殿にて節分の豆まきを子ども向けに開催●スロープに変え、放置自転車をなくす●単なる屋台やイベントが目当ての人ではなく、神社のリピーターの増加を目指した行事の開催［来訪者］□近所なので参拝している□通り抜けるとマンションの入口があって驚いた

No.13 金刀比羅宮 Kotohiragu Shrine

［従前］○桜田通りから社殿が見えなかった［従後］●2000年から日建設計の亀井忠夫が設計統括を行う●見えるような参道を設けた●通りの前の鳥居は新しく造営●神楽殿も地下の駐車場の整備と高さの規制のため建替●貸し会議室を所有し、そこで直会などの行事も行う［来訪者］□面談で訪問した会社の近くだったので参拝した□ちょっと虎ノ門ヒルズに寄ってから参拝できるところが良い□近代的な建物だが、古いところもあって良い

No.14 小石川大神宮 Koishikawadaijingu（現在工事中につき、遷座中のため掲載なし）
No.15 御嶽神社 Mitake Shrine（来訪者ヒアリング不可のため掲載なし）
No.17 朝日神社 Asahi Shrine

［従前］○昔はイチョウの木が6,7本生えていた［従後］●社殿は変えずに遷座した●全てコンパクトに収める●日照権、近隣との兼ね合い、容積率を考慮●抜いた植栽は御用材として再利用［来訪者］□御朱印を受けにきた□会社が近くなので参拝した□ほおずき市など行事が多い

No.18 松島神社 Matsushima Shrine

［従前］○雨漏りの治らない社殿［従後］●社殿を守るためにビルで囲い、天窓を設置●3Fまでは神社の施設とし、上の階をテナントビルに●ビルのファサードの意匠は設計会社の意向［来訪者］□ネットで調べ御朱印を受けにきた□日本橋の七福神めぐりにきた□神社がビルの中にあり、都会の神社だなと思った

No.19 築土神社 Tsukudo Shrine

［従前］○社殿が東向きで参道から横向きになっていた○以前はもう少し木が生えていた［従後］●社殿の方位を道路に面する北向きに●社殿の平面規模は変えず、高さをビルに合わせ引き上げ●ビルと神社のアプローチのゾーニングなどを考慮［来訪者］□オフィスの近くなので参拝した□神社めぐりが好きで、平将門関係の神社を参拝している□アプローチの組み合わせ方が良く厳かな雰囲気だった

凡例：
- 社殿 Shrine
- 神社と同一敷地内に建つ商業施設、マンション、オフィス等の建物 Commercial facilities, condominiums, offices, and other buildings on the same site as the shrine
- その他神社の建物（神楽殿、祈祷受付、社務所等）Other shrine buildings

Example:

Fig.5 Summary of narrations about the change of shrines

いるが、日比谷神社と築土神社では東向きだった社殿は道路からよく見える北や西向きに変化している。反対に、小石川大神宮では神社本来のかたちを守るという意思から、西向きから南向きに変化している。

②意匠

社殿の建て替えが行われた神社は20社のうち12社であり、その多くは設計者によって意匠・様式やその変化の有無が決められており、神社側の意向は反映されていない。社殿の意匠に関する設計者の意図として、環境の変化への対応策などが挙げられた。騒音に配慮した例では、日比谷神社は窓ガラスを二重サッシにする、雉子神社は社殿と道路の間にオフィスビルを建てるなどの工夫を行なっている。また築土神社では周囲の建物に合わせた高さの嵩上げ、北谷稲荷神社では国立代々木競技場を意識した屋根のデザインなど周囲の建物に合わせた意匠がある。また、拝殿の平面規模は建て替え時に大きくすることもあり(n=5/12)、内装照明やガラス戸などの変化がみられ、社殿を小さくした神社はなかった。

2) 境内建物の計画

多くの神社で境内建物の全面的な建替が行われている(n=12/20)。金刀比羅宮と築土神社ではオフィスとゾーニングされたアプローチ、水天宮では一方通行の整備、赤城神社では出雲大社から着想した階段、天祖神社では周囲との壁を失くした見晴らし、赤城神社、成子天神社、須賀神社では集合住宅を神社に馴染ませる配慮が語られた。

3) その他の空間変容

神社の境内と接する街区に関しては、開発を契機として敷地が統合されている。植栽に関しては減少傾向にある(n=8)が、増加した福徳神社と天祖神社は、周辺開発によって接する境外が神社の森となるように配置されている。また、簸川神社では急峻な崖の杭留めに集合住宅の壁面を利用する工夫がみられた。しかし、特に神社の祭神を意識した開発の語りなどはみられなかった。

3-3 祭礼とオープンスペースの利用

Table1に示した神社の特徴を参照すると、町会・神社共に御神輿のない神社(n=5)は、神職が常駐していない神社か崇敬神社[注13]であることがわかる。また、祭礼時に露店を出している神社(n=7)は、いずれもまちなか、まちかまえ神社である。これは、露店を開くための場所や搬入経路の確保しやすい街区の配置が必要であるからだと考えられる。さらにオープンスペースを利用した行事では、朝日神社が主催する「ほおずき市」や、町会や民間との連携によるイベントなどがある。そのほか普段からオープンスペースが利用されている例では、須賀神社の老人会の輪投げでの利用などが挙げられる。

3-4 神社の開発後の利用実態の現況

対象神社の来訪者に対するヒアリング並びに滞留状況の調査の概要をTable3に示す。対象者の詳細は、Table1に示したとおりである。調査で得られた来訪目的に関する語りを、街区内の神社の配置による類型ごとに整理し、その実態をまとめた[注14]。

1) まちなか神社：副次目的化

成子天神社、須賀神社、豊岩稲荷神社、福徳神社、天祖神社の5社が該当する(n=25)。境外参道をもつ成子天神社と須賀神社では、通勤、通学などの参拝以外の利用が頻繁に見受けられる。福徳神社や天祖神社では、仕事や生活での休憩の場として求められている。豊岩稲荷神社では、銀座のパワースポットとして注目する様子が見られる。このようにまちなか神社は、主たる目的地ではない副次的な利用の実態がみられた。

Table3 Interview in 3-4

調査対象 Subject	対象神社の来訪者 (詳細はTable1を参照)	Visitors to the target shrine (See Table1 for details)
調査期間 Period	2019/9/21ー2019/10/21	
調査方法 Survey method	該当神社の来訪者のうち取材許可の得られた者(18社,N=69)の3分程度の対面式ヒアリング並びに滞留状況の調査。	3-minute face-to-face interviews with visitors to the shrines who have been granted permission to be interviewed(18 shrines,N=69).
調査項目 Survey Items	(1)基本情報、滞留状況 (2)来訪理由 (3)神社の心象	(1)Basic information (2)Reason for visit (3)Mental image of the shrine

2) まちかど神社：(継続)

日比谷神社、水天宮、浜町神社の3社が該当する(n=11)。日比谷神社は環状2号線と線路が交差する見晴らしの良い位置にあり、新規来訪者が多い。水天宮は氏子をもたない崇敬神社であり、安産の神様を祀り信仰を集めているため遠方からの参拝者も多い。浜町神社では、再開発マンション棟の居住者が通りすがりに参拝した、散歩やランニング中に偶然見つけ参拝したなどの語りが得られた。このようにまちかど神社は新規の来訪者を迎えやすい特徴がある。

3) まちかまえ神社：境内分節化

赤城神社、雉子神社、簸川神社、稲荷神社、金刀比羅宮の5社が該当する(n=15)。赤城神社、簸川神社、稲荷神社では集合住宅が併設されているが、その住民と参拝者との交流は少なく、広い境内の中で棲み分けがなされている。これはオフィスビルをもち利用者に応じたゾーニングが行われている雉子神社と金刀比羅宮においても同様である。このようにまちかまえ神社では、境内の広さを活かした目的別のゾーニングによる境内分節化が進んでいる。

4) まちなみ神社：参拝流行化

小石川大神宮、御嶽神社、朝日稲荷神社、朝日神社、松島神社、築土神社の6社が該当する(n=14)。小石川大神宮は2019年現在遷座中であることに加え、御嶽神社は不許可のため取材していない。朝日稲荷神社は拝殿が地上階にあり、本殿はビル屋上にあるため、前者では通りすがりに拝む高齢者が多く、後者では映画のロケ地として話題になったため、映画の撮影場所をめぐる聖地巡礼に訪れる者が多く見られた。朝日神社や松島神社、築土神社では、御朱印を求める人が多く見受けられた。このようにまちなみ神社は、参拝を目的として神社に訪れている人が多いが、その参拝理由がロケ地や御朱印といった流行によって形成される参拝流行化が進んでいる。

5) まちぎわ神社：外部展開化

北谷稲荷神社のみが該当する(n=4)。渋谷の街から外れた位置に立地し、御神輿が出る祭礼時も人足は多くない。しかし、その御神輿によって渋谷の各所に用意された休憩所が担ぎ手の一時的な居場所として利用されている。このようにまちぎわ神社では、拠点を繁華街に散在させることで、神社の認知を深め、外部展開化している。

3-5 小結

1) 神社の空間変容と管理者の意識

民間による開発があった神社の多くは再都市化過程における都市開発によって変容したことがわかった。管理者はデザインに関して、社殿の位置や方位などに関心がある一方で、境内建物のアプローチや植栽、そのほか神社全体の配置計画に対しては関心が薄いことがうかがえた。また祭礼を催行するにあたり、御神輿の有無は

まちなか神社 Machinaka	まちかど神社 Machikado	まちかまえ神社 Machikamae	まちなみ神社 Machinami	まちぎわ神社 Machigiwa
街区内のアクセスの良さからまちの中心になっている	都市の交差点にあり人びとの目印となっている	広い境内によって、荘厳な雰囲気が演出される	通りに沿った敷地にあり、来訪者が視認しにくい位置にある	まちとの関係が切り離された位置にある
副次目的化 Secondary Objectification	継続 continuation	境内分節化 Separation of precincts	参拝流行化 Popularization of worship	外部展開化 External expansion
まちなかに開発された施設の付加的な要素になる	立地の効果を生かして新たな来訪者を呼び込む	利用者に応じたゾーニングによって、境内を二分する	御朱印などの流行に乗じた集客が増加する	祭礼を通じて外部の繁華街へと展開する

Fig.6 Change of shrines by private development(summary)

神職の常駐、露店の有無は神社の街区内の配置が重要であることがわかった。

2）都市開発による神社の役割の変容

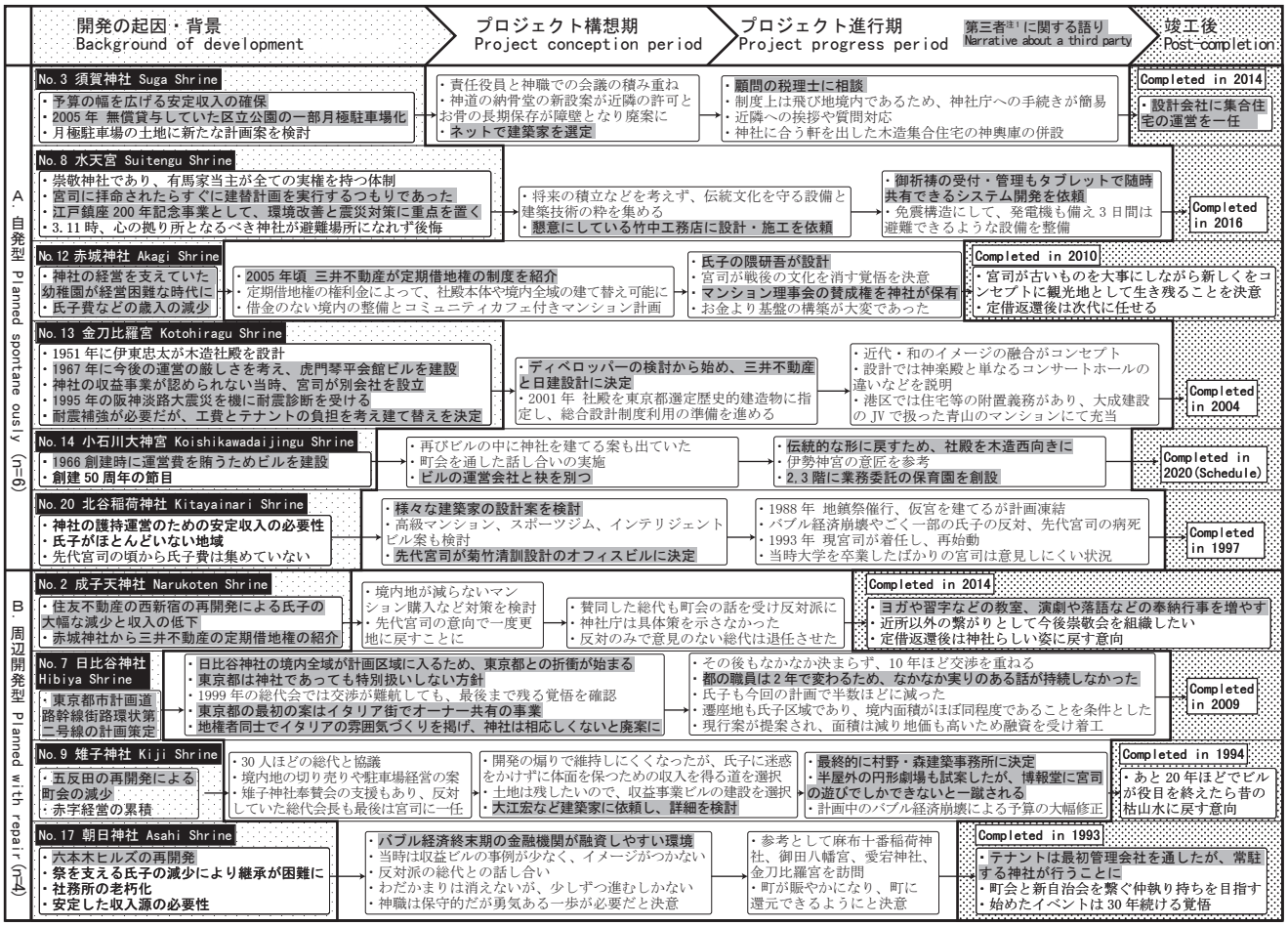
対象神社の来訪者の目的調査から浮かび上がった役割の変容をFig.6にまとめた。民間により開発された東京の20社の神社を調査することで、都市開発による役割や利用の変化は現況として街区内の配置ごとに異なる特色をもっていることがわかった。まちなか神社はアクセスの良い中心的位置にあることから商業施設のなかで憩いの場となっているなど副次目的化が進んでいる。まちかど神社はもともとアイストップになっていた神社が、都市のなかで偶然見かけられることにより、普段神社に訪れないような人びとも迎え入れる場になっている。まちかまえ神社は広い境内が利用目的に応じてゾーニングされ、空間が二分された境内分節化が起きている。まちなみ神社は目立ちにくい立地だが、新たなコンテンツが付加されることで、特定の人びとの目的地となるなど参拝流行化の動きがみられる。まちぎわ神社は社殿が都市と切り離されているが、祭礼を通じて人びととの新たな結びつきを発生させる場が形成されるなど外部展開化がみられる。このように、それぞれの立地特性が活かされながら、現代の都市のなかに適応しつつある実態がわかった。

Table4 Interview in Chapt.4

調査対象 Subject	対象神社の神職・事務員	Managers of target shrines
調査期間 Period	2019/9/25ー2019/10/21	
調査方法 Survey method	該当神社のうち取材許可の得られた神職や実態を知る事務員（N=20）の1ー2時間程度の対面式ヒアリング調査。	Two-hour face-to-face interviews with the administrators(N=20) of the shrines with permission to be interviewed.
調査項目 Survey Items	(1)基本情報 (2)開発の経緯 (3)人物・組織関係	(1)Basic information (2)Background of development (3)Person organization relationship

4章 民間開発による神社の開発経緯

本章では、神社の管理者を対象としたオーラルヒストリー調査によって、各事例の開発経緯を把握する[注15]。そして神社を取り巻く人びととの関係性や意思決定プロセス、民間都市開発のインセンティブとなるような制度利用の実態を明らかにする。調査概要をTable4に示し、20社の開発経緯をFig.7にまとめた。開発経緯の段階を「**開発の起因・背景**」、「**開発における合意形成の過程**」、「**竣工後の計**



注1 第三者とは、神社に関係する神職、氏子、総代、住民以外のディベロッパーや設計者等を示す。

Fig.7-1 Process of development of shrines(part1)

画・イベント」の3つに分け、以下にその語りを整理した。

4-1 開発の起因・背景

1) 開発経緯に関する分析の着眼点

ここでは、「財政的課題」の在り方と「発案した主体」の2点が開発経緯を左右するものとして抽出された。財政的課題は、収入の安定化と減収入の補填に大別される。前者は氏子費など安定収入の少ない神社が該当する。後者は社殿の老朽化や、周辺の開発による氏子・町会の縮小に伴う疲弊が起きている神社が該当した。発案した主体は、神職や総代など神社関係者か第三者であるディベロッパー、隣接建物のオーナーなどである。また、日比谷神社は東京都の環状2号線の計画によって遷座を余儀なくされたことから、唯一行政が起因となった開発であることがわかった。

2) 開発経緯の類型

上記の二軸で開発経緯を整理すると、「**自発型**」「**周辺開発型**」「**誘われ型**」「**修繕型**」という4つの類型が得られた(Table5)。

① 自発型

氏子の減少などの理由を鑑みて、神職自らが計画・立案した神社である(n=6)。特定の氏子地域をもたないため、概ね神職の意向がそのまま反映され、自発的に行動を起こしやすい崇敬神社や、都心で氏子がほとんどいない神社と、他の収益事業を行なっていたため金銭的余裕やノウハウがある神社が該当した。

② 修繕型

社殿や境内地の建替等の工事に伴い、収益事業を始めた神社である(n=4)。社殿の漏水が治らない神社と急で危険な斜面地の補強が必要であった神社が該当した。

Table5 Four starting points of shrine development

	目的・財政的課題 Financial Challenges	
	収入の安定化 Stabilization of income	減収入の補填 Compensation for reduced income
発案した主体 Entity that conceived the idea：神社 Shrines	1) 自発型 (n=6) Planned spontane ously 氏子の減少などの理由はあるが、自らが計画・立案した神社 ex. 金刀比羅宮：特定の氏子区域をもたない崇敬神社であり、神社の意向が反映されやすい	2) 修繕型 (n=4) Planned with repair 社殿や境内地の建替等の工事に伴い、収益事業を始めた神社 ex. 稲荷神社：社殿の漏水が治らず、建て替えにはまとまったお金が必要であった
発案した主体 Entity that conceived the idea：行政・民間 Government and private sector	3) 誘われ型 (n=6) Invited by surrounds 誘われ型は隣接する建物やディベロッパーから共同事業をもちかけられた神社 ex. 福徳神社：野村不動産と三井不動産のコレド室町・神社再生計画	4) 周辺開発型 (n=4) Compressed by surrounds 再開発によって氏子や町が大きく縮減され、神社の影響範囲が徐々に圧迫されている神社 ex. 朝日神社：六本木ヒルズの再開発による氏子の減少が起きた

③ 誘われ型

隣接する建物などのディベロッパーから共同事業をもちかけられた神社である(n=6)。共同の建物の建設もしくは周辺一帯の再開発事業の計画区域にあった神社が該当した。

④ 周辺開発型

再開発事業の対象地となった氏子や氏子区域が大きく縮減され、神社の影響が小さくなり、氏子費など金銭面においても徐々に圧迫されている神社である(n=4)。近隣で大きな再開発の起きた神社と、東京都の整備事業範囲にあった神社が該当した。

4-2 開発における合意形成の過程

次に開発の計画を立案する構想期から、実際に計画を進める進行期までの各主体との関係性の構築について、以下のように整理した。

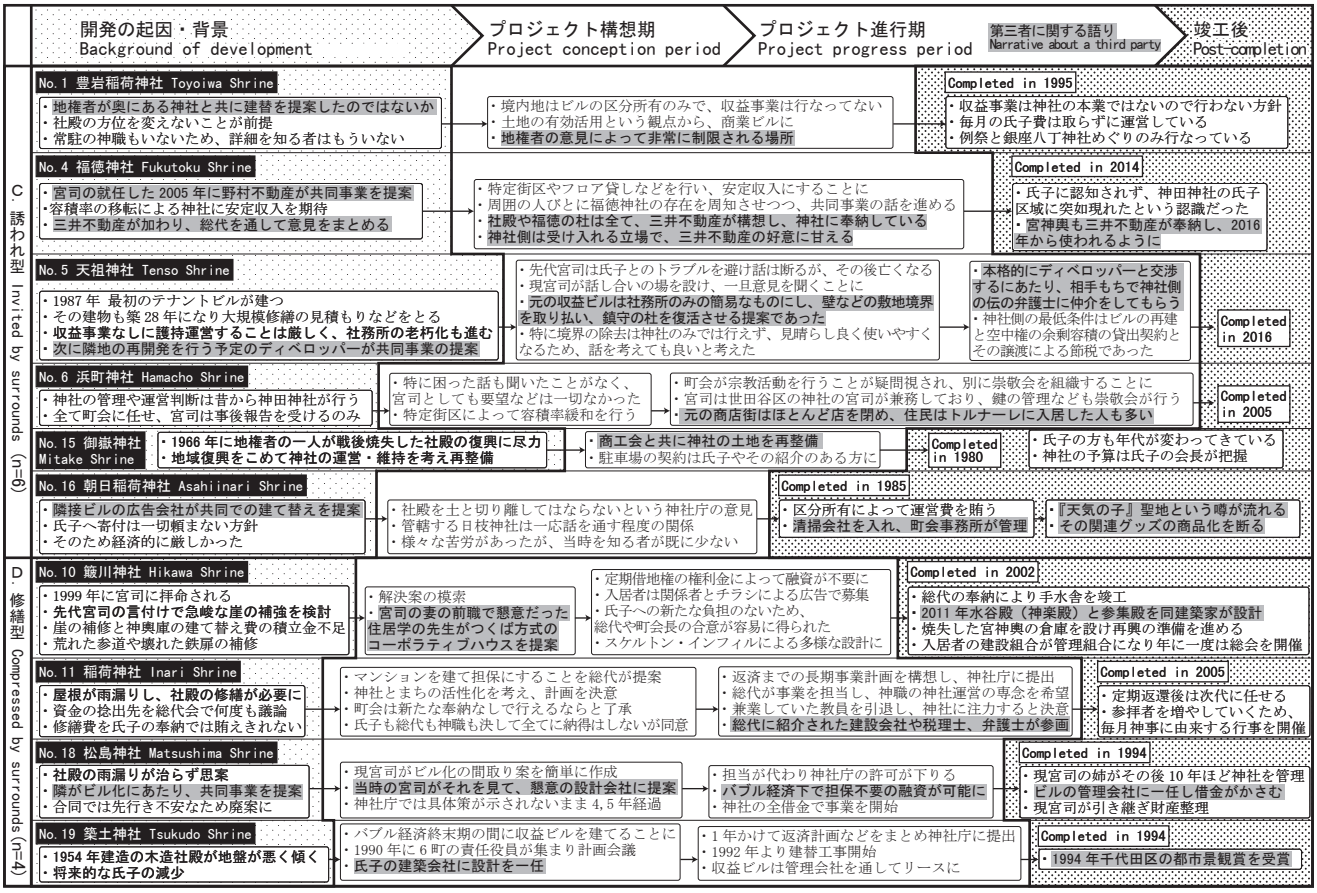


Fig. 7-2 Process of development of shrines(part2)

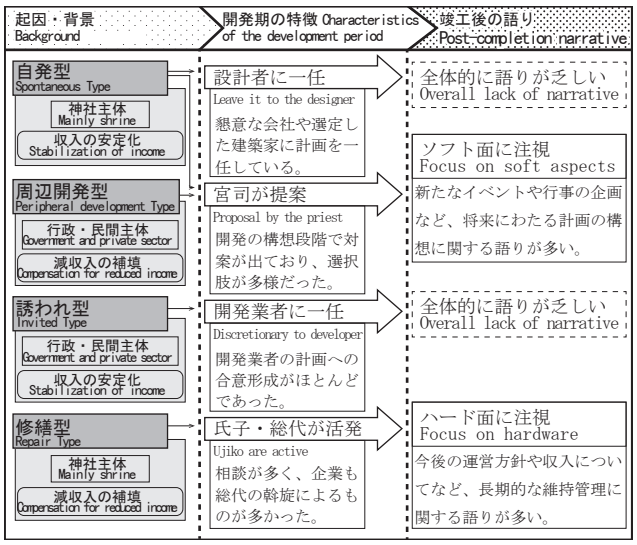


Fig.8 Narratives of post-completion in relation of backgrounds

① 総代・責任役員

金融会社や不動産会社、設計会社、弁護士などの紹介・斡旋を行うことが多い。総代会など宮司と少数で会議することが多く、神社の意思決定を行う一人としてもその責任は重い。

② 氏子

計画の決定後に氏子に対して説明会を開くことが多いため、計画の変更が難しく、8社で反対する者がいたが、その意見が反映されたのは日照権の問題で戸数を減らした簸川神社のみであった。

③ 開発業者、金融機関、設計者

多くが総代などの紹介だが、開発業者発意の場合や、独自に建築家を選定した場合などがある。開発業者との打ち合わせでは、神社の配置計画など本来希望や条件が多い部分の神社側の積極的参画は低調である。

④ 他の神社、神社庁

事務手続きのみの関係が多く、意見交換による進展もあまりない。また、神社間での情報共有が不十分で、こうした収益事業が初めてか2回目だという語りが9社から得られた。

⑤ 税理士、弁護士

総代などからの紹介も多いが、天祖神社では対等に計画の交渉を行うために開発業者が金銭補助をしている。

4-3 竣工後の計画・イベント

続いて、竣工後の見通しに関する語りを、開発の起因と関連付けて整理した(Fig.8)。開発期の特徴として設計者に一任している神社は自発型に多く、竣工後の語りは全体的に乏しい。宮司の提案が多い神社は自発型の一部と周辺開発型が当てはまり、竣工後の語りが多くイベントの企画等ソフト面に注視している。開発業者に一任している神社は誘われ型に多く、竣工後の語りは全体的に乏しい。氏子・総代が活発な神社は修繕型に多く、竣工後の語りでは今後の収入や長期的な維持管理などハード面に注視している。全体として竣工後の見通しについての語りが得られたものは12社のみであり、将来的な計画への言及の少なさがうかがえる。

4-4 民間開発による神社の開発における制度利用

以上の開発では、以下の3点の制度利用の実態が把握された。

①定期借地権による土地の貸借

成子天神社、簸川神社、稲荷神社そして赤城神社では一般定期借地権による土地の貸借が行われている。50年以上の契約の終了時には土地を更地に戻すことになっているため、土地を売買することに抵抗をもつ神社・寺院では、返還されることを前提に財政的課題を解決できるため活用事例が多い。一方で、未だ契約終了の前例がなく、実際に建つマンション等とどのように向き合うべきか不透明な部分も多い。

②特定街区、再開発等促進区、総合設計制度の活用

福徳神社に隣接するCOREDO室町の特定街区での容積率の移転や、浜町神社に隣接するトルナーレ日本橋浜町の再開発等促進区による容積率の緩和、金刀比羅宮に隣接する虎ノ門琴平タワーの総合設計制度による余剰容積の有効活用が挙げられる。低層の社殿の余剰容積が開発業者のインセンティブとなり、社殿の保全には繋がるが、結果的に神社と高層ビルの隣接を促進しているとも捉えられる。

③その他

その他、神社が開発に際して収入や関わりを作る方法として、収益ビルの区分所有やフロア貸しを通じた安定収入や利用スペースの確保、隣接マンションの理事会の賛成権保有による意思決定の参加などがある。また簸川神社ではコーポラティブハウスを採用しており、入居前から建設組合を通じた協議の場があり、その後も管理組合による総会でつながりを保ちやすいメリットがある。

4-5小結

1) 開発経緯にみる合意形成の課題

神社の開発経緯はその起因が大きな分岐点となっている。これは神社が潜在的に抱える経済的不安定さを安定化するものと、減収入分の補填をするものに分けられる。さらにその開発の主導者を神社とそれ以外の行政・民間とすると、自発型、修繕型、誘われ型、周辺開発型の4つに分けられる。また、開発における合意形成の過程では、それぞれの立場の主体がどのように行動しているのか明らかにした。そこでは、総代の意見が第三者の斡旋に集中し、進行期においての参画が少ない点、ディベロッパーや設計者を通したデザインの決定に対して、神職の関心が薄く意向が定まっていない点などの問題点が明らかになった。そして竣工後の計画・イベントについては、設計者や開発業者に一任した神社ほど語りが少なく、神社の転換点となるべきプロジェクトを建物の竣工で終えてしまう神社が多く、その後の計画に対する視点が乏しいことが明らかになった。こうした開発の際には、定期借地権による土地の賃借、特定街区などによる余剰容積の活用、所有方法や維持管理の工夫による収益ビルとの積極的な関わりがみられることが明らかになった。

2) 開発の背景にある神社と各主体との関係性

神社の開発の背景は、神職、氏子総代、ディベロッパーなど多くの人びとの関係性のなかで構築されている(次頁Fig.9)。まず、神社側では神職と氏子・総代の間での意見集約が難航し、初期段階からの氏子の参画が少ないことや金銭的な補助を必要としない神社の増加が、合意形成に至らない要因として浮かび上がった。次に融資側では交渉が円滑に進む一方で、境内での建物建設案以外の検討が少なく、経済性や事業性に留まらない提案が求められている。さらに設計側では、融資側との関係が密接になり、独立した視点が失われていること、神社側のデザインに対する意見が反映されにくいことなどから、両者を交えた議論が少ないことに課題をもつ。

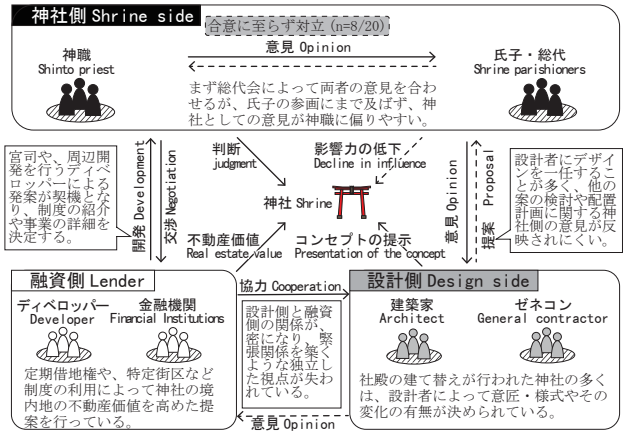


Fig. 9 Relation of powers around the shrines

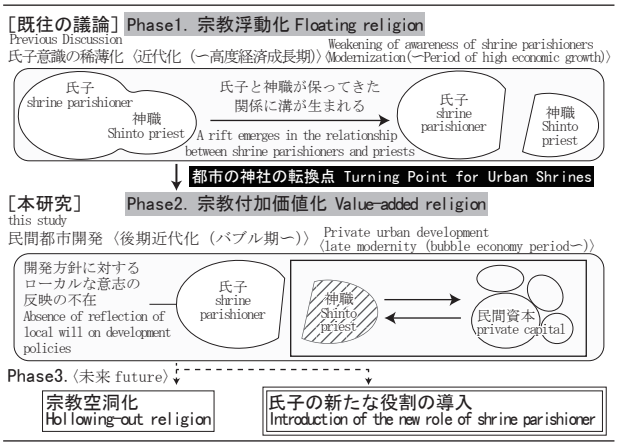


Fig. 10 2 phases of Modern change of shrines and their future

5章 結言

5-1 研究の総括

1） 都市に存続する神社の空間類型とその利用実態

2章で行った都区部の神社の悉皆調査では、境外参道の有無と神社の街区内の配置によって、都市化が進み街区が整えられた2019年現在の神社を類型化した。次に3章では、そのなかでも民間都市開発の対象となった神社20社に着目し、詳細な空間変容とその利用実態を明らかにした。その多くは再都市化過程の開発によって都市の街区のなかに再編され、境内建物の全面的な建替が行われ、意匠的な配慮がみられた。これらの結果を要約すると、街区内の配置による「まちなか神社」、「まちかど神社」、「まちかまえ神社」、「まちなみ神社」、「まちぎわ神社」の類型ごとに都市開発を経た神社では、来訪者の行動からその街区の類型ごとに応じた役割が見出されている実態がわかった。本稿ではそれらを「副次目的化」、「境内分節化」、「参拝流行化」、「外部展開化」と整理した。

2） 神社をめぐる都市開発の経緯と主体の関係性

4章では、対象神社の管理者の語りから、社殿の意匠や建物の配置計画に向けての合意形成の過程を概観し、現代の都市の神社の開発を取り巻く主体の関係性を明らかにした。その結果、開発は財政的課題を発端とした4つの類型に整理され、本来反映されるべき氏子の意見が適切に汲み取られていない問題や、神職の主体的な参画があまりみられないこと、定期借地権や特定街区などの制度利用が開発業者のインセンティブになっていることがわかった。また、宮司の提案が多い「自発型」の一部と「周辺開発型」の神社では、ソフト面に注視した語りが多く、氏子・総代が活発な「修繕型」の神社では、ハード面に注視した語りが多く、「自発型」の一部と「誘われ型」の神社では、設計者や開発業者に一任され竣工後の語りが乏しいことが明らかになった。そのため開発の起因の影響力が大きく、その後の開発プロセスまで一途に話が進み、従来の神社が保っていた神職と氏子・総代との関係性が不均衡になっていることがわかった。

5-2 変容する神社と都市開発の開発圧力の止揚にむけて(Fig. 10)

神社をめぐる主体の関係については、戦後以来氏子意識の稀薄化が議論されてきた[注16]。これは、核家族化に伴う宗教浮動化として論じられ、本稿でみた、のちに生じる神社の開発における氏子の合意形成への不関与という実態の土台となっていることが指摘できる。結果として民間開発は宗教付加価値化を進め、特に不動産の付加価値としての神社に着目した新たな価値の創出をもたらしつつある。このように、民間都市開発による神社の変容は、戦後以来の宗教浮動化と宗教付加価値化のなかに位置付けられる。

神社をめぐる人びとの諸力の関係は、21世紀初頭に入って不均衡な状態にある。本稿では開発業者による氏子地域への介入、神職が護持運営のために進めた収益事業による経済的自立が、氏子・総代の影響力の低下をまねき、神社を継承すべき氏子が主体的に参画できない、無関心になっていく等の問題を引き起こしていることを示した。

これらの都市開発は安易な観光地化や商業的価値の向上に結び付き、もはや宗教自体が形骸化し役割を失う宗教空洞化へと結びつくことが危惧される。これに対して、地域の日常的な利用者の意志が反映される氏子の参画が抑止力となり、神社は圧力の構造を再び均衡に保つことが期待できる。本調査でも開発期に氏子・総代が活発な神社では、ハード面への関心と提案が多くみられた。氏子がともに運営方針を考え、第三者に一任されやすい配置計画や今後のイベントの企画などに参画する新たな役割と、その判断力をもつことが必要とされる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、神社本庁統理・鷹司尚武様をはじめ、多くの神社関係者の方々にご協力いただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

注

注1) (参考文献1)の「1「山の手」の表層と深層」を参照。

注2) 例えば、1964年の東京五輪における一連の開発による寺社などの破壊が問題となったように不可侵な領域だと認識されていた。

注3) 本稿では、人口の都心回帰や再開発事業等の進行を背景としながら、1990年代以降の都心部の空間が再編されていく過程を「再都市化」とする。

注4) (参考文献2)を参照。

注5) (参考文献3)を参照。

注6) 本稿では神社の開発経緯をその発端から現在まで管理者の口述から明らかにしていく調査を「オーラルヒストリー調査」とした。

注7) 本稿ではあくまで都市インフラが整備され街区が整えられた現況の神社の配置を調査している。従って、都市における神社のもつ歴史の全体というよりも、現在の都市に対する役割や影響を論点としている。

注8) 旧別格官幣社、別表神社、東京十社のいずれかに該当する17社を旧別格神社とした。具体的には、旧別格官幣社である靖国神社、別表神社で

ある日枝神社、東京大神宮、神田神社、湯島天満宮、乃木神社、明治神宮、東郷神社、大宮八幡宮、井草八幡宮、重複を除いた東京十社である根津神社、白山神社、芝大神宮、氷川神社、品川神社、亀戸天神社、王子神社である。

注9) 狭義の「境内地」は宗教法人が宗教活動に用いるための土地であり、所有に関係なく月極駐車場や集合住宅は境内地に含まない。しかし本稿では、実際に宗教活動に用いられているかどうかを地図情報から読み取ることは困難であるため、広義の境内地として地図情報及び必要に応じて現地調査から神社と一体の空間範囲を推定している。

注10) (参考文献15)の「3微地形と場所性」を参照。

注11) (参考文献1)の「3 近代都市のレトリック」を参照。

注12) ヒアリング対象者は、開発時の当事者であった宮司や10年以上勤める神職に調査しているが、神職が社務所に常駐しない神社についてはその管理や維持を行なっている事務員を対象とした。そのためこの調査から得られる情報は、神社側からみた開発像である点は注意が必要である。

注13) 崇敬神社とは血縁・地縁的な関係以外の個人の信仰等により崇敬される氏子をもたない神社である。

注14) 調査人数の妥当性について考慮し、神社ごとの比較ではなく、「まちなか神社(5社が該当し計25人調査)」「まちかど神社(3社が該当し計11人調査)」などの単位で比較した。各調査人数は本文中に丸括弧(n)で示した。

注15) オーラルヒストリー調査は、各神社がどのように開発に対応してきたのかを明らかにするものであるが、神社側で開発経緯を知る者は概して少ないため、各神社のヒアリング対象者数は1名で妥当であると考えられる。なお本調査は、再都市化とともに進行する神社の空間的再編を扱うもので、それ以前の過去からの変容は検討の対象に含めない。

注16) (参考文献16)の「終章 宗教と社会の「戦後」の宿題」を参照。

参考文献

1) Hidenobu Jinnai: Spatial Anthropology of Tokyo, Chikuma Shobo, 1992 (in Japanese)
陣内秀信：東京の空間人類学，筑摩書房，1992

2) Sharon Zukin:Naked City: The Death and Life of Authentic Urban Places, Oxford University Press, 2010

3) Anthony Giddens:The Third Way, The Renewal of Social Democracy, Polity, 1998

4) Tokyo-jinjacho: Shrines in Tokyo / Shinto Priests / Directory, 2013 (in Japanese)
東京都神社庁：東京都神社/神職/名簿，2013

5) Yuji Horiguchi and Shigeyasu Kanazawa: The Relevance of Shrines and Places of Excitement: A Case Study of Matsubara Shrine, Saga, Journal of the City Planning Institute of Japan, 31, pp.271-276, 1996 (in Japanese)
堀口雄嗣，金澤成保：神社と盛り場空間の関連性-佐賀・松原神社の事例研究-，日本都市計画学会学術研究論文集(31)，pp. 271-276,1996

6) Yu Okamura, Takeru Kitazawa and Yukio Nishimura: A Study on the Spatial Characteristics of Approaches to Shrines: A Case Study of Central Tokyo, Journal of Urban Planning, 40(3), pp.823-828, 2005 (in Japanese)
岡村祐，北沢猛，西村幸夫：境外参道の空間特性に関する研究-東京都都心部をケーススタディとして-，都市計画論文集，40(3)，pp. 823-828，2005

7) Ryuji Fujimura, Mirei Nouchi, Yoshiharu Tsukamoto: Composition and History of Hollow City District as Fragmentary Urban Form, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), 75(658),pp.2977-2982, 2010 (in Japanese)
藤村龍至，内部美玲，塚本由晴：断片的都市形態としての中空街区の構成と履歴，日本建築学会計画系論文集75 (658)，pp. 2977-2982，2010

8) Joongfin Shin, Shigeru Sato, Hiroshi Saito, Koji Matsumoto: A Study on the Chain Reaction of Redevelopment in Front of Station and Related Projects Part 2: Linkage Relationship between Redevelopment Project and Shopping Street Environment Improvement Project and its Realization Process, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ), 62(494),pp.179-186, 1997 (in Japanese)
慎重進，佐藤滋，斉藤博，松本光司：駅前再開発と関連事業の連鎖的展開に関する研究その2 再開発事業と商店街環境整備事業の連携関係とその実現プロセスについて，日本建築学会計画系論文集62(494)，pp. 179-186，1997

9) Katsuya Amemiya and Fumihiko Seta: A Study on Urban Development Projects and Urban Area Management in Central Tokyo: A Case Study of Tokyo Midtown, Journal of Urban Planning, 48(3), pp.477-482, 2013 (in Japanese)
雨宮克也，瀬田史彦：東京都心部の都市開発事業と都心型エリアマネジメントに関する研究：東京ミッドタウンを事例として，都市計画論文集，48(3)，pp. 477-482，2013

10) Kenji Ishii: Urbanization and Shinto Shrines: A Case Study of Asahi Inari Shrine in Ginza, Annual Report of the Religious Studies, University of Tokyo(7), pp.19-34, 1990 (in Japanese)
石井研士：都市化と神社 ： 銀座の朝日稲荷神社の事例から」東京大学宗教学年報 (7)，pp. 19-34，1990

11) Katsuya Amemiya and Fumihiko Seta: A Study on the Roles of Area Management in the Preservation and Revitalization of Historical Contexts through the Coordination of Urban Development: A Case Study of the Nihonbashi Muromachi East District Development and the Honmachi 2-chome Specific District, Journal of Urban Planning, 50(3), pp.1252-1257,2015 (in Japanese)
雨宮克也，瀬田史彦：都市開発の連携による歴史的文脈の保全・再生とエリアマネジメントの役割に関する研究-日本橋室町東地区開発と本町二丁目特定街区を事例として-，都市計画論文集，50(3)，pp. 1252-1257，2015

12) Sheng-syun Min, Shigeru Sato: A Study on the Analysis of Urban District Form by Urban Architectural Typology: A Study on the Theory of District Planning by the Method of Urban Architectural Morphology (1), Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), 72(621),pp.53-60, 2007 (in Japanese)
関勝炫，佐藤滋：都市建築の類型による街区形態の解析に関する研究 ： 都市建築形態学の方法による街区計画論に関する研究(1)，日本建築学会計画系論文集 72(621)，pp. 53-60，2007

13) Atsushi Fujiwara, Ryohei Ono, Hiroshi Ito, Akio Shimomura : The Influence of Road Development Based on Modern City Planning on Urban Formation in Shinobazu Street, Tokyo, Landscape Research, Journal of the Landscape Institute of Japan 70(5),pp.701-706, 2007 (in Japanese)
藤原敦，小野良平，伊藤弘，下村彰男：東京・不忍通りにみる近代都市計画に基づく道路整備が都市形成に与えた影響，ランドスケープ研究 ：日本造園学会誌70(5)，pp. 701-706，2007

14) Ikumi Sawada, Haruhiko Goto and Shun Yoshie: Typology and Location of "Machikado" as a Familiar Public Space Based on Impression Evaluation: From the Analysis of Four Areas that Escaped the Damage by the War, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), 86(779),pp.185-195, 2021 (in Japanese)
澤田郁実，後藤春彦，吉江俊：身近な公共空間としての「まちかど」の印象評価に基づく類型とその立地：－戦災被害を逃れた４地域の分析から－，日本建築学会計画系論文集 86(779)，pp. 185-195，2021

15) Fumihiko Maki and Associates: Visible Cities, Kajima Publishing Co.,1980 (in Japanese)
槇文彦：見えがくれする都市，鹿島出版会，1980

16) Munemasa Horie: Postwar History of Religion and Society, University of Tokyo Press, 2019 (in Japanese)
堀江宗正：宗教と社会の戦後史，東京大学出版会，2019

URBAN REDEVELOPMENT OF SHRINES IN TOKYO AFTER 1990

-A Spatial Analysis of Shrines in Tokyo and an Oral History of the Development Process-

Toki IZUMIKAWA [*1], *Haruhiko GOTO* [*2], *Shun YOSHIE* [*3] *and Ryoya MORITA* [*4]

[*1] Graduate Student, Graduate School of Creative Sci. & Eng., Waseda Univ.
[*2] Prof., Faculty of Creative Sci. & Eng., Waseda Univ., Dr.Eng.
[*3] Assistant Prof., Dept. of Architecture, Waseda Univ., Dr.Eng.
[*4] Assoc. Prof., Ctr. for Comm. Engagement and Lifelong Learning, Tokushima Univ., Ph.D.

In Tokyo, sacred spaces such as shrines and temples are closely connected to places of daily life, and have built the city as a whole. Many of these sacred spaces were spared from development even during the period of rapid economic growth. However, under the pressure of re-urbanization, which has progressed along with the return of the population to urban centers since 1990, shrines have finally been exposed to integrated development with the surrounding areas. In the shrines exposed to development in Japan's major cities, the struggle between the old and the new that urban planning has long been engaged in is taking place. However, the research field of urban planning has not paid much attention to these realities, and in fact, as we will see later, each future vision is left to the judgment of each individual who is exposed to development pressure. In response to the above background, this paper aims to clarify the history of urban development and the spatial transformation of shrines through an survey and case studies of 795 shrines in the Tokyo words area. In summary, the following 2 points were found.

1) Spatial types of shrines surviving in cities and their actual use

Through a comprehensive survey of shrines in the Tokyo words area, the spatial typology of surviving shrines in Tokyo was determined based on the presence or absence of external approaches to the shrine grounds and the layout of shrines in the districts. In particular, we focused on 20 shrines that had been the subject of private urban development, and clarified their detailed spatial transformation and actual use. Many of the shrines were transformed by urban development in the process of re-urbanization, and the buildings within the shrine grounds were completely reconstructed and redesigned. The shrines in Tokyo were classified into five types according to their location in the district: "Machinaka Shrine," "Machikado Shrine," "Machikamae Shrine," "Machinami Shrine," and "Machigiwa Shrine. In this paper, we grasped their transformation and summarized as "secondary purposes," "precinct segmentation," "popularity of worship," and "external development.

2) Urban development of shrines and the actors

From the narratives of the administrators of the target shrines, we reviewed the process of consensus building for architectural design and layout planning, and clarified the relationship between the subjects surrounding the development of shrines in modern ages. As a result, we found that development was organized into four categories triggered by financial issues. The paper also showed that the opinions of the shrine parishioners were not properly taken into account, that there was little proactive participation by the priests, and that the use of systems such as fixed-term land leases and specific city blocks served as incentives for developers. In conclusion, the power of the people associated with shrines has been disproportionate since the beginning of the 21 centuries. This paper showed that the intervention of developers in the shrine parishioners' communities and the economic independence of Shinto priests through profit-making projects for the purpose of maintaining and managing the shrine leads to a decline in the influence of shrine parishioners and representatives, and causes problems in which shrine parishioners who should succeed the shrine are unable to participate and become indifferent.

（2021 年 8 月 1 日原稿受理，2021 年 12 月 10 日採用決定）